

京都市放課後対策事業検討会議 議事録

日 時 令和4年12月23日（金） 14:00～15:20
会 場 職員会館かもがわ 2階 大会議室
出席者 会 長 神部 純一 （滋賀大学教育学部教授）
副会長 國重 晴彦 （公益社団法人京都市児童館学童連盟常務理事）
〃 中村 薫 （京都市小学校校長会副会長・京都市祥栄小学校長）
委 員 片岡 栞里 （市民公募委員）
〃 木戸 玲子 （公益社団法人京都市児童館学童連盟施設長会副会長）
〃 神内 貴司 （京都市小学校長会会計・京都市下京雅小学校長）
〃 古澤 奈央子 （京都市立中学校PTA連絡協議会副会長）
〃 三吉 淳子 （京都市立小学校PTA連絡協議会庶務）

【※会長、副会長を除き五十音順。敬称略】

事務局 子ども若者はぐくみ局子ども若者未来部育成推進課
（塩山子ども若者未来部長、荻原担当課長、大野担当課長 他）

神部会長

まずは議題1の、令和4年度の実施状況について、事務局から説明をお願いします。

事務局（資料に基づき説明）

＜資料1 放課後まなび教室の概要＞

＜資料2－1 放課後まなび教室の実施状況＞

＜資料2－2 「令和4年度放課後まなび教室学校別一覧」＞

昨年度の本検討会議で委員から放課後まなび教室の広報について2点ご意見をいただいていたので、その後の対応状況を報告する。

1点目は、「ボランティアの募集にあたり、特に学生への周知が必要ではないか」というご意見について。これについては、年度当初に市内の大学に募集のチラシを配架するとともに、大学にボランティアセンターを設置している大学に直接訪問し、学生ボランティアの依頼を行ってきた。令和4年度では、大学の協力もあり、現在約20名の学生からボランティア登録の申込を受け付けている。

2点目は、「就学前の保護者に対しても周知が必要ではないか」というご意見について。これについては、来年2月ごろに各校で実施される就学前説明会・体験入学に際して、保護者の方々へ周知チラシの配布を各小学校に依頼する予定である。

神部会長

続けて児童館・学童クラブの説明をお願いします。

事務局（資料に基づき説明）

＜資料3「児童館・学童クラブの概要」＞

＜資料4「放課後ほっとひろば」の実施状況について＞

＜資料5－1学童クラブ事業登録児童数＞

＜資料5－2学童クラブの実施場所の確保状況＞

神部会長

さて、今のご説明について、それぞれのお立場からご質問・ご意見・ご提案等も含めて委員の方々に伺いたい。

中村副会長

子どもが宿題などの家庭学習を放課後まなび教室にて終えて帰ってくるので、助かっているといった保護者の声を多く耳にする。宿題を終えた後の子どもたちの過ごし方について、塗り絵などの楽しい催しの内容がそれぞれの放課後まなび教室によって少しずつ異なっている。

この3年間、スタッフの皆様は感染対策を入念に行ってください、参加していただいている地域の方々も子どもたちが来る前に窓から机からすべて拭いて掃除を行ったのち、子どもたちを受け入れてくださっており、大変安心できる場を作ってください。

神内委員

4月から今の学校に来たので前任校（太秦小）と比べた様子を申し上げる。学校によって随分やり方が異なっているように感じている。それぞれの放課後まなびスタッフによって年齢層も異なっており、受け入れ方に違いがあるように思う。前任校では、大規模校だったのでコロナ前は200人以上の登録があり、複数の教室への割り振り方などから対応いただいたり、子どもたちが楽しめるようなクリスマス会や外でシャボン玉を作るなどの行事を行っていただいたりしていた。しかし、コロナ以降はすべての希望児童に参加いただけない状況になってしまったが、制限の中、ご理解をいただきながらまなび教室をおこなっていた。現在の学校では比較的在籍児童が少ないため、受け入れが可能で、登録児童全員に利用していただきたいと思っている。また、現在の学校では、スタッフの年齢層が高いことから、学生ボランティアの受け入れが学校によっては難しい状況であると感じた。

古澤委員

子どもが大学生と中学3年生ということで大きくなっているが、放課後まなび教室には2人とも6年間お世話になり、先ほど先生がおっしゃったように、保護者としては家庭学習をきっちりして帰ってきてくれるのと、その後自分で勉強するペースをつかめたりすることが、成長につながり非常にありがたく感じている。また、地域のボランティアの方と接する機会ができ、今もお世話になったボランティアの方に会えると、覚えていてくださって声をかけていただいたりして、子どもにとっては良い経験をさせていただいたなと思っている。コロナ禍で今は厳しい状況かと思うが、以前と同じように子どもたちが通えるようになればいいなと思う。

三吉委員

私は小学3年生、4年生の娘が二人おり、まなび教室にも学童クラブにも通わせていて、私自身もまなびスタッフとして活動させていただいており、まなび教室を知ったときは非常にありがたい活動だなと思い、すぐに子どもを入れた。お勉強のサポートをさせていただくうえで、自分の子どもたちだけでなく、他の子どもたちを見ていて、どの子とどの子がどういう関係性にあるかなど、先生とは違う視点で、子どものことを理解できて大変ありがたい場所だなと実感している。

片岡委員

私は現在大学3年生ですが、大学1年生の10月ごろからまなび教室でサポーターをしている。私の行っている学校（池田小）は少人数の学校なので、他学年が一緒になって勉強を教え合いながら、子どもたちも教え合うし、サポーターも支援を行いながら、ゆっくりした時間が流れているといった印象です。コロナ禍では、1人で勉強をしてすぐに帰るといった運営形態だったのですが、最近は緩和されて、勉強が終わったら、塗り絵や折り紙、将棋、オセロをして、みんなで楽しんで帰りましょうといった運営形態がとられている。学校とは連携が取れている印象があって、教室内で特定の子同士で衝突があれば、その教室のメンバーを入れ替えたりして、密接に協力できているのかなと思う。一方で、学童とは関わりがなく、まなび教室のあとに学童に行く子もいるので、もっと情報共有ができればいいなと思っている。

神部会長

片岡委員は、今は何回生か。

片岡委員

3回生です。

神部会長

3年間行っているということは、コロナ禍が始まった頃からスタッフでおられたということで、コロナ禍の最初の方と比べると、だいぶ元通りの運営に戻りつつあると感じているのか。

片岡委員

戻りつつあると感じている。

木戸委員

学童クラブは、年々利用を希望される方が増えていて、それぞれの学童クラブによつての違いはあるが、児童の受入は今まで3年生までで、障害をもっているお子さんは4年生までだったが、6年生までになって、1つの館の中に1年生から6年生がいるという良さと、難しさというのは感じるところがある。1年生や2年生の方は人数が多いが、それぞれの子どもにとって、高学年であっても自分の大事な放課後であり、居場所であるところが、遅い時間に来ると低学年が遊び始めていて、高学年がなかなか学童クラブの中で居場所を作れないというような部分もあるので、それぞれの学年に応じてという中では、一か所にいることの良さと難しさを感じている。

また、ほとんどが一元化児童館で実施している中、すべての子どもたちの居場所ということになるので、学童クラブに登録している子だけでなく、登録していない子どもたちも遊びに来ているし、乳幼児から中学生、高校生もやってくるので、色々な場面で直接的に、または間接的に関わりを持つというところで、幅広く子どもたちが経験をする場所であると思うのだが、今おっしゃっていた、まなびとの連携は、どこにどのようにアプローチしていけば良いのかというところがあって、学校側との連携はあるが、直接的にまなびに関わっている方々とのやりとりは難しいなと感じている。

神部会長

はい。まさにそこが今日の後半の話題ということになる。今は、児童館での活動は、1年生から6年生までいて、同学年で遊ぶということが主流で、異学年での交流はあまり見られないのか。

木戸委員

いえ、学童クラブへはいろんな学校からも来ているので、学年を越えて子どもたちが関係をもっているところがある。しかし、それも良いところと悪いところがあって、異年齢で遊ぶと学びがあったりするが、衝突するところもたくさんある。

神部会長

その衝突というのは、例えば喧嘩とか。

木戸委員

そうです。小学1年生が偉そうに言ったら、5・6年生は不快になりますし、遊ぶ場所もお互いに様子を伺いながら、高学年が激しく遊んでいるのを低学年は入りたいけれど入れずにいる。高学年がいなくなったら同じ遊びを低学年が始めたりとか、いつも子どもたちに「じゃあどうしたらできるやろ。」って問いかけをする中で考えていたり、高学年が「こういうふうにしたらどうやろ。」って言ったことを、低学年は学び取っているところもあるので、そういった点は異年齢で遊ぶことの良さだと感じている。

國重副会長

児童館というところが、制度上0歳から18歳までの子どもたちを対象にしているということで、コロナ禍にあっても困難な活動を強いられたのですが、世代を超えて年齢を超えた交流が行われている。先ほど資料で示されたように、学童クラブは毎年右肩上がりに増えてきているということで、待機児童0といった話もありますが、現場ではどうやって実施場所や内容の充実を図っていけるか、それぞれの学童クラブで工夫している。今日は学校の先生方がおられるので、ぜひ空き教室等あれば、使用させていただければと思っている。一方で、放課後ほっと広場というものがあり、約600人いて、児童館も学童保育所もない地域で少人数を対象に実施しているが、学童保育所というものが500人ほどで、今や本体の学童保育所を上回るような人数になっているので、そういった中で、職員体制であったり、配置予算であったり、私自身は大きな課題があるのではないかと考えており、京都市のお考えをお聞かせいただきたい。児童館としては、子どもたちの生活と支援といった観点から引き続き活動を展開していきたいと思っている。

神部会長

国重委員から放課後ほっと広場の今後のあり方、方針についてお聞きしたいということでありましたので、事務局にお伺いする。

事務局

放課後ほっと広場や地域学童クラブなど、京都市が指定管理など委託で実施するものとは違う形態もある。それぞれの事業は、様々な成り立ちがあり、現行の制度のもとで利用している児童もたくさんいる中で、国重委員から発言のあった課題も認識しているところである。しかし、一律に事業を見直すことには慎重に考えていく必要がある。事業そのものを根本的に見直すのではなく、事業のニーズや実施世帯の状況など、各地域の実情など踏まえながら、個別に具体的に検討していく必要があると考えている。

神部会長

登録児童数を見たときに、学童の登録数が増えている中、まなび教室の登録者数が減少傾向にあるように見えるが、事務局の説明によると、11月以降に1年生の登録数が増え、最終的には令和3年度並みの人数になるということか。

事務局

令和3年度の登録数は9,326人だが、11月末で比較すると、昨年とほぼ変わらないくらいになっている。1年生は11月から始まるところが多いので、令和2年度、3年度に近い数字に最終的にはなるのではないかと考えており、コロナ以降ほぼ横ばいで推移する見込みである。

神部会長

以前であればまなびの登録率は2割ぐらいであったが、コロナ禍で15%前後になったということだが、良い事業をしているのでコロナが落ち着いたら上昇傾向に入ってくるのかと思う。学童クラブについては、380名増加しているが、例年と比べて多いのか。

事務局

毎年、登録児童数にばらつきがあるが、コロナの影響により一定鈍化していたところが、今年度伸びてきた印象にある。

神部会長

これからコロナが落ち着くのか微妙なところではあるけれども、今年は控えていた人たちが安心して登録してくれるようになったという予測はつく。来年、再来年あたりの数を見ながら少し考えていく必要が出てくるのかもしれない。

去年、委員の方々にいただいたご意見等については、先ほど事務局からご説明いただいたとおり、学生ボランティアの周知や就学前の保護者への周知というものはしっかりしていただいているとのことだが、それでもまだまだ学生ボランティアは足りないといった印象がある。せっかく京都というアドバンテージのあるところで、子どもたちにとっても比較的自分に近い存在である高校生や大学生という立場との

関わりは大きいと思うので、これからも力を入れていただきたい。

ひととおり、皆さんのご意見をお伺いした。他にご意見がないようであれば、1つ目の議題は終了します。

神部会長

では、2番目の児童館学童クラブ事業と放課後まなび教室の連携に向けた取り組みについて、事務局から説明をお願いします。

事務局（資料に基づき説明）

<資料6-1「令和4年度連携に向けた取組状況について」>

<資料6-2「放課後子どもミーティング 協議内容」>

<資料6-3「放課後子どもミーティング アンケート結果について」>

<資料6-4「放課後ニュース」>

神部会長

学童クラブと放課後まなび教室とのスタッフ間の対話・連携については、何年も前から毎年議題になっていたのだが、お互いの事を知らないまま、それぞれがうまくいっているのだから連携などしなくて良いのではないかという意見が多かった。しかし、お互いの事を知らないで最初から食わず嫌いで言うのではなく、一度対話をしてお互いの事を理解したうえで、地域性もある中で連携できるところとそうでないところを考えていくのが良いと思う。

コロナの影響でなかなか実施できなかったが、ようやくモデル校3校の対話や情報共有ができるようになり、対話をした結果としての報告が上がってきている。

こうした試み、報告を見ていただき、学童クラブと放課後まなび教室の連携に向けた今後の取組について委員の皆様からご意見・ご質問・ご提案を聞かせていただき、次年度からの取組に活かしていきたいと思う。

中村委員

実際まなび教室に行っている方からの意見もあり、両者での情報共有があるということは大事なことだと思う。指導員としてどのような情報が知りたいかというと、個々の子どもの家庭の状況や背景、困りごとなどを理解した上で、子どもたちへ支援や、言葉をかけたいと思うが、子どもの個人情報に関わることなので難しい。児童館の方では保護者の方との直接のつながりもあるため、情報は共有できている。まなび教室では、地域の方の関わりがあり、個人情報との兼ね合いが難しい。小学校と学童クラブが1対1の場合は比較的可能だが、校区が広く複数の学校からの参加がある学童クラブや、複数の学童クラブに分かれている学校などでは、個人情報の取り扱いが難しい。ただこんなことを実施しているということをお互いに知るということは良いことであると思う。

神内委員

学校の立場からも両事業がつながりを持つことは良いことだ。現状では学校が間に入って対応してい

ることが多く、つながりができることで直接顔のわかる相手との関わりができて良いと思う。距離が近い場合や1か所対1校の場合は比較的可能だが、距離が遠い場合や、2か所以上の学校から集まっている場合は、少し難しいことも考えられる。それぞれの現状に合わせてできることをするのが良い。一度でもミーティング等で会っていただき、顔見知りになることで何かのきっかけになれば良いと思う。

神部会長

今まで学童クラブとまなび教室の交流や情報共有がなく、学校を通して連絡をしなければならないということが度々あったのか。

神内委員

例えば学童クラブに来ていない子がいるという連絡があり、まなび教室を見に行ったらそこにいたということもあった。直接つながっていてくれば、子どもたちの安全にもつながる対応ができるという良い面もあるかと思う。

神部会長

学童と放課後まなび教室の間を学校が連絡を取っていたことが、直接の連絡ができることで学校側の負担感の軽減に繋がるという良い面もあると考えられる。

古澤委員

同じ小学校の中に両方があり、距離が近い場合や、そうでない場合など各校・各クラブによって事情が違うと思うが、一度でも顔を合わせていることで保護者としては連携が取れているという安心感がある。現在は、保護者の方に連絡を取ったりしているが、両事業の連携が取れるようになれば、子どもの所在確認もスムーズにやり取りができると思う。何かしら良い方法で実施できたらと思う。

三吉委員

PTA 会長として学童クラブとは共催でイベントをすることもあり、館長先生とまなび教室との関わりについて話すことがある。このようなミーティングを行い、連携をとる事は良いことだ。ただ個人情報については扱いが難しい。学童クラブとまなび教室での様子が違う子どももいて、各個人の状態を理解・共有することでより良い対応ができると思うが、ただ情報をどこまで伝えていいかどうか悩む。お互いに関係性を作るためにも、ミーティングを実施し、情報共有を行うとともに、顔見知りになることは重要と考える。

片岡委員

放課後子どもミーティングの実施には賛成だ。まなび教室に行った後、学童に行かないといけな子子どもが行きたがらないことがあり、学童クラブでの具体的な活動内容がわからないために、なぜ行きたがらないのか、どのように声掛けをすれば良かったのか、わからなかった。お互いの活動内容の共有だけでもできればもっと理解が深まるのではないかと思う。

木戸委員

子どもによってどの場所が良いのか、どこにいたいかはそれぞれ。子どもの所在が分からなくなることが危うく、避けたいことだ。両者の顔が見える関係性になることは良いこと。情報共有については全部というわけではなく、選ばなければいけないのではないかな。

本日欠席の山本委員について、児童館を利用されている保護者ということもあり、いただいたご意見を紹介する。

「子どもの放課後を複数の目が見るということは良いことであり、それぞれの場所で子どもの様子が違うので、それぞれの働きも違うと思う。子どもたちを尊重しながら連携を取り、子ども達を見ていく事が大事と思っている。」

國重副会長

子どもたちの放課後の過ごし方を考えていくことは大切だ。各現場の現状に合わせた放課後子どもミーティングの実施方法があると思う。一方で、放課後児童対策事業ということで学童クラブ・児童館・放課後まなび教室という事業を中心に議論しているが、どちらにも参加していない子どもの現状を確認し、どのようなアプローチをしていくかの視点を持つことも大事かと思う。数値化はしにくいものかとは思いますが、どのようなアプローチをしていくのかも大事なことではないかと思う。

神部会長

放課後対策事業という面では、参加していない子どもたちの実態を知り、対応していくことも大切かと思うが、実態の把握はできるのか事務局にお伺いする。

事務局

全体の小学生の数をもとに学童に登録している児童数から、登録していない児童数を算定することも可能だが、児童全体の放課後の登録していない理由等を含めた詳細を把握することは今のところ難しい。

本会議は事業についての話し合いなので、全体的な対応については、はぐくみ局だけではなく、もっと大きな視点での検討が必要になると思う。

神部会長

現状では、この場で議題にすることではないかもしれないが、課題意識を持つことは大事だと思う。

木戸委員

学校が早く終わる日や長期休暇中は、児童館と公園に子どもがあふれている状況にある。時間を持て余している子どもも多い。学校の生活が中心で、放課後の子どもたちの生活を見ていく場所などについて、どのように見守ってあげるのかという問題意識を持つことも必要だと思う。

神部会長

誰一人取りこぼさないことを考えていきたい。そういったことを心掛けながら見守っていきましょう。

ミーティングをすることが目的ではないが、まずは、まなびのスタッフと学童のスタッフがお互いの顔

を知るということ。普段からできる範囲での情報を交換することで、何かあった時に連絡がしやすくなる。連携のできやすい同じ敷地の中に両事業がある所から始めて行く事が良いのではないか。情報共有と人間関係の先に連携があると思う。離れている場所でも、お互いの顔を知り合うということは、子どもの居場所を確認する時にも話がし易くなる。子どもたちの生活を良くしようという思いでつながりながら話し合うことが、出発点になるのではないか。ミーティングを通じてどのような取組が生まれてきたのかをしっかりと情報発信していくことを事務局には期待している。京都市の放課後対策事業を全体として底上げできていけばよいのではと思う。

最後に、本日欠席の稲川委員より、放課後の連携について意見をいただいているので、資料をご確認いただきたい。

ありがとうございました。本日の議題は以上です。行政の皆様も本日の内容を受け止め、次年度の事業に活かしていただきたいと思います。

以上